

神奈川県小田原市方言におけるいくつかの音声現象の動向

著者名(日)	久野 マリ子, 木川 行央
雑誌名	言語科学研究 : 神田外語大学大学院紀要
巻	18
ページ	11-30
発行年	2012-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00000974/

神奈川県小田原市方言におけるいくつかの音声現象の動向

久野マリ子 木川 行央

首都圏の方言は、東京語と類似点が多いため、調査研究の対象となることが少なく、実体が十分に解明されているとは言い難い。その首都圏の方言について、その変容も含め明らかにするための調査の一環として神奈川県小田原市において行った多人数調査を行った。本稿ではその結果の内、音声現象について報告する。この調査の結果、連濁については現在の東京語ではあまり見られなくなった形が用いられていることが確認できた。その一方で、若年層を中心に東京語と同じ変化を示すものの存在も認められた。さらに、「雰囲気」のフインキ、「原因」のゲーイン、「体育」のタイクといった発音は高年層にも見られ、首都圏方言の伝統的方言に既に存在していた可能性を示唆する可能性がある。

1. 研究の概要

本研究は、平成23年に実施した小田原市方言調査の結果の一部である。

首都圏は、急激な社会変動と政治経済機能の一極集中が、地域の拡大やそこに住む住民の急激な増加を招き、社会構造が複雑に、また大きく変容した。その結果、首都圏方言は伝統的な地域方言と、全国からの移住者の共通語化した方言、共通語を母語とする移住者2世3世の方言が混在した言語となり、その実態は複雑な様相を呈している。本研究では伝統的な地域方言の実態と共通語を使用した日常の話しことばという問題に注目している。

首都圏方言の体系が伝統的東京方言や、東京周辺地域の方言との関わりが深いことは、その基盤となった江戸語の成立、東京語の相からも明らかである。しかし、東京周辺地域の方言体系は共通語や東京語に類似する点が多いためその実体はまだ十分に解明されているとはいえない。そこで、本稿では、首都圏に含まれる神奈川県小田原市の方言の音声現象を例に、その一端を見ていきたい。

小田原市方言の特徴を見るために、まず小田原市の歴史をみていく。

小田原市は神奈川県相模湾沿岸部の湘南地方より西の地域の総称である西湘の中心都市である。1940（昭和15）年に小田原市が発足し、2000（平成12）年には特例市となった。人口198,373人（2010年現在）で、横浜市、川崎市、相模原市につぐ神奈川県内で第4番目の市である。戦国時代は後北条氏の城下町であり、江戸時代には東国の要衝として譜代大名を藩主とする小田原藩の城下町となる。また、箱根の山越えを控えた宿場町であり、その規模は東海道中最大であった。

1871（明治4）年に小田原藩が小田原県となり、さらに県合併により相模川以西の旧相模国と旧伊豆国全域を管轄区域とする足柄県が設置されると、県庁が小田原に置かれた。その後1876（明治9）年に足柄県は分割され、小田原を含む相模国部分は神奈川県に、伊豆国部分は静岡県となる。1923（大正12）年関東大震災では、震源地であったために激しい被害を受ける。

1927（昭和2）年小田原鉄道、1934（昭和9）年丹那トンネル開通で東海道本線が小田原市街地を通るようになった。1964（昭和39）年に東海道新幹線が開通し、東京・横浜への所要時間も大きく短縮された。一時は東京のベッドタウン化したとも言われたが、小田原市ホームページに、「子どもは、四季を感じられる自然豊かな環境で育てたい。都会の喧騒や便利さと、付かず離れずでいたい。」という町のスローガンにみられるように、東京からはすこし距離がある。また、J R小田原駅から都内に新幹線通勤している人は約3,000人おり、新幹線なら東京駅まで36分、J Rも私鉄も小田原駅始発の電車が多く、座って通勤できるので、東京・横浜方面の通勤には、かえって好都合であるともうたっている。

このように、小田原市は東京都心からやや離れているため、東京語の影響を受けながらも伝統的関東方言の特徴を保持し、また急激な人口変動も少なく、伝統的な地域集団の結束力も強いので、東京周辺地域の古相を保ちやすいといえよう。

小田原市方言は、東條（1954）に従えば、関東方言の中の西関東方言に含まれる。神奈川県内の区画については、文法・語彙の分布を基にした区画が日野（1964）に示されているが、それによれば相模川西部方言の足柄方言となる。

しかし、日野（1984）によれば、神奈川県全体が「音韻・アクセント・文法では県内にそれほどきわだった地域差が現れ」（p.277）ず、「音声・音韻＝音節の種類やその現れ方という側面から見ると、東京語と大差はない」。ただし、足柄方言の俚言の中には静岡県の俚言と共通のものがある場合がある（pp.281－282）。

本研究では、首都圏方言の古相としての特徴およびその変化を明らかにするため、2011年9月小田原市の中心部から少し離れた穴部（伊豆箱根鉄道大雄山線で7分）において年代別多人数調査をおこなった。

2. 調査について

調査は面接法で、調査項目はアクセント55、音韻36、文法9、語彙4項目である。調査項目は2011年1月に予備調査で明らかになった事象、また1982年と1983年に、東京在住者（初年度の対象者は205名、二年度は1037名）を対象に東京語のゆれを調査した国広・中本（1984）を参考に、伝統的東京方言の特徴を示す項目を中心に選定した。

話者は、小田原市穴部生え抜きを原則としたが、中には穴部近郊の方で協力いただいた方もある。86歳から11歳までの72名で年代、性別と人数は表1の通りである。なお、以下の集計では10・20代、30・40代、50・60代、70代以上に分類した。

表1 話者

年齢	男	女	小計
10代	2	6	8
20代	1	5	6
30代	1	0	1
40代	8	6	14
50代	9	4	13
60代	5	7	12
70代	6	7	13
80代	3	2	5
合計	35	37	72

3. 音声的特徴について

伝統的東京方言の音声的特徴としては、ガ行鼻濁音、母音の無声化、連濁、直音化、ヒとシの混同、連母音の融合などがよく知られる。本調査では、予備調査によって確認した、連濁、直音化、ヒとシの混同、ラ行音の撥音化について調査した（なお、表記は基本的にカタカナ書きとする。上記日野（1984）のように音声的には東京語と大差がないため、カナの表す音は東京語と同様であると考えて良い）。

小田原市方言ではガ行鼻濁音は、東京都内より比較的良く保たれている。今回の調査項目には採用しなかったが、若年層においても東京都内よりは保持率が高いという印象がある。また、母音の無声化は、今回の調査項目には入れなかったが、予備調査で、無声子音に挟まれた狭母音は、アクセントの山がこないときは義務的に無声化するという義務的無声化が観察された。

3.1 連濁について

連濁とは、複合語において後部要素の語頭子音が有声化する現象で、関西方言よりは東京方言の方が連濁する傾向が強いといわれている。本調査では、共通語でも連濁形と非連濁形が併用される語、共通語では連濁しない語が小田原市方言で連濁する語、共通語で非連濁であった語が連濁形に変化しつつある語の連濁傾向について調査した。

以下、調査結果を見ていくが、年代差についていえば、年齢が高いほど連濁形が現れ若年層で非連濁形になる語と、高年齢層で非連濁形の語が若年層で連濁形が現れる語とがある。さらに、若年層では、共通語化とみられる現象、つまり共通語で連濁形が優勢になる語では小田原市方言でも若年層に連濁形式が増える傾向もある。

(1) 「5分位」

「駅まで5分位かかる」で聞いた、「名詞+位」の例で、連濁形5分グライの方が全年層を通じて優勢である。

年齢別にみると、高年齢層では5分グライの連濁形が優勢で、若年層では些かであるが、非連濁形の5分クライが増えている。表内の（ ）は、その年

代の中での各形式の出現率を表す。以下同じ。

	70代以上	50・60代	30・40代	10・20代	計
クライ	3 (16.7)	6 (24)	4 (26.7)	7 (50)	20
グライ	14 (77.8)	17 (68)	10 (66.7)	6 (42.9)	47
両方	1 (5.6)	2 (8)	1 (6.7)	1 (7.1)	5

(2) 「電話する位」

「電話する位の時間はある」で聞いた「動詞+位」の例で、「名詞+位」ほどではないが、電話するグライが多い。年代差、性別差はない。年齢別に見ると、全年層を通じて電話するグライのほうがやや多いが有意差はみられない。

	70代以上	50・60代	30・40代	10・20代	計
クライ	7 (38.9)	12 (48)	6 (40)	5 (35.7)	30
グライ	10 (55.6)	12 (48)	9 (60)	9 (64.3)	40
両方	1 (5.6)	1 (4)	0	0	2

なお、国広・中本（1984）にも、同じ項目があるが、それによると、(1)（国広・中本1984では「10分位」）は、年齢が高くなるにつれグライが多くなるが、(2)は年齢による差があまりない。小田原の結果も同じ傾向が認められる。品詞による違いがあるかと思われるが、同書によると、「今日位」はあまり年齢差が認められず、品詞によると考えて良いのか、不明である。

(3) 「着替える」

「服を着替える」で聞いたが、全体的には連濁形キガエルが優勢で、全年層を通じて使われる。一方、非連濁形のキカエルは50・60代以上で現れ、30・40代以下の若年層では現れなかった。

ここで、一般的な国語辞典『広辞苑第六版』（以下『広辞苑』）、『日本国語大辞典第二版』（以下『日国』）、『明鏡国語辞典第二版』（以下『明鏡』）によって確認してみると、全て、非連濁形「きかえる」が立項され、連濁形「きがえる」は本文注記となっている。共通語としては非連濁形が認められてい

ると言えそうだが、『NHK日本語発音アクセント辞典 改訂新版』(以下『NHK』)、『新明解日本語アクセント辞典』(以下『新明解』)はともに、キカエルを主の見出しとしているものの、『NHK』はキガエルを「場合により許される発音」として()内に示し、『新明解』はキガエルを「新」としている。また、この項目も、国広・中本(1984)に同じ項目があり、キカエルが高年層に多く、若年層ではキガエルとなっている。小田原の結果もキカエルが高年層にわずかではあるが現れるが、キガエルが優勢である。なお、国広・中本(1984)と比べると、国広・中本(1984)の方が、キカエルの割合が多い。調査時期の影響であるのか、地域差によるものか、明言することは難しい。

	70代以上	50・60代	30・40代	10・20代	計
キガエル	15 (83.3)	23 (92)	15 (100)	14 (100)	67
キカエル	2 (11.1)	1 (4)	0	0	3
両方	1 (5.6)	1 (4)	0	0	2

(4) 「呼び捨て」

連濁形のヨビズテが現れるのは、併用形を含めて45歳以上の話者で、30代および10・20代では現れない。全体的には、非連濁のヨビズテのほうが優勢で、全年代を通じて用いられる。

『広辞苑』、『日国』では非連濁形「よびすて」で立項され、「よびずてとも」と併記されている。なお、『日国』は、用例として挙げている滑稽本「大山道中膝栗毛」(1832年)や「浮世太平楽ぽんぽんいふ人見立」(1830-1840年)、さらに夏目漱石「三四郎」(1908年)の例の読みを、ルビなどから「よびずて」としている。一方『明鏡』、『NHK』、『新明解』では非連濁の「よびすて」だけが立項され、「よびずて」の注記はない。共通語としては非連濁形の「よびすて」が優勢になっており、小田原市方言で連濁形ヨビズテが若年層で消えているのと同じ変化がみてとれる。

	70代以	50・60代	30・40代	10・20代	計
ヨビズテ	6 (33.3)	5 (20)	0	0	11
ヨビステ	9 (50)	20 (80)	14 (93.3)	14 (100)	57
両方	3 (16.7)	0	1 (6.7)	0	4

(5) 「ひっくり返る」

「足を取られてひっくり返る」の文脈で聞いている。

非連濁のヒックリカエルが、連濁形のヒックリガエルより優勢で、全年代を通じて用いられ、連濁形ヒックリガエルは10・20代以外で用いられる。

『広辞苑』、『明鏡』、『NHK』、『新明解』では非連濁形「ひっくりかえる」のみが立項されているが、『日国』では連濁形「ひっくりがえる」ともいうという記述がある。

国広・中本（1984）の調査では、どの世代でもヒックリカエルが多いが、世代差があるとは言い難い。

	70代以上	50・60代	30・40代	10・20代	計
ヒックリガエル	3 (16.7)	7 (28)	3 (20)	0	13
ヒックリカエル	13 (72.2)	17 (68)	12 (80)	14 (100)	56
両方	1 (5.6)	1 (4)	0	0	2
未確認	1 (5.6)	0	0	0	1

(6) 「でんでん太鼓」

非連濁形のデンデンタイコは高年層で用いられる。連濁形デンデンタイコが全体的に優勢で、82歳から11歳までの全年代の話者が答えている。非連濁のデンデンタイコは、50・60代以上の話者が答え、それ以下の若年層では用いられなくなっている。

『広辞苑』では非連濁形「でんでんたいこ」が見出しで立項され、『日国』、『明鏡』では連濁形「でんでんたいこ」で立項されているが、『日国』には、1893年刊行の『風俗画報』50号に「東京にて所謂田々太鼓(デンデンタイコ)

の大なるを鞍上に立て」の例が挙げられている。さらに、『NHK』は両形をあげ、『新明解』はデンデンタイコを見出しとし、「新はデンデンダイコ」としている。小田原市方言の高年層に現れる非連濁形デンデンタイコは、東京語の古い姿を反映していると考えられる。

	70代以上	50・60代	30・40代	10・20代	計
デンデンダイコ	10 (55.6)	21 (84)	15 (100)	13 (92.9)	59
デンデンタイコ	7 (38.9)	4 (16)	0	0	11
両方	1 (5.6)	0	0	0	1
知らない	0	0	0	1 (7.1)	1

(7) 「通り掛かる」

「近くを通り掛かった」の文脈で聞いている。

連濁形トーリガカタと非連濁形トーリカカタはほとんどどの年代でも使われているが、60代から40代では連濁形トーリガカタのほうが優勢である。

『日国』では非連濁形「とおりがかる」を見出しとし、連濁形については「とおりがかるとも」という注記がなされているが、『広辞苑』、『明鏡』、『NHK』、『新明解』では非連濁形の「とおりがかる」しか立項されていない。なお、『日国』には、1891年の落語「性和善」の「頻りに念仏を称えながら、ポッカリ跳込もうとする処へ通係（トホリガカ）りました」の例が挙げられている。

	70代以上	50・60代	30・40代	10・20代	計
トーリガカタ	7 (38.9)	15 (60)	9 (60)	4 (28.6)	35
トーリカカタ	10 (55.6)	7 (28)	5 (33.3)	10 (71.4)	32
両方	1 (5.6)	3 (12)	1 (6.7)	0	5

(8) 「言葉少な」

非連濁形コトバスクナが優勢であるが、全年層を通じて連濁形コトバズ

クナも用いられる。

連濁形コトバズクナが各年層を通じて現れるのは「通り掛かる」と類似した傾向である。『日国』、『広辞苑』では連濁形「ことばずくな」だけが立項され、『明鏡』では「ことばずくな」が主見出しで、「ことばすくな」は注記されている。また、『NHK』では、非連濁形のコトバズクナニが主見出しで、「コトバズクナニも」という注記がなされている。

	70代以上	50・60代	30・40代	10・20代	計
コトバズクナ	14 (77.8)	22 (88)	12 (80)	5 (35.7)	53
コトバズクナ	3 (16.7)	3 (12)	2 (13.3)	3 (21.4)	11
N R	1 (5.6)	0	1 (6.7)	6 (42.9)	8

(9) 「三階」

全年代を通じて、連濁形のサンガイが優勢であるが、劣勢ながら、非連濁形のサンカイも各年層に観察される。

非連濁形のサンカイと答えた若年層は20代3名である。この例は、東京都内の大学生が、「3+助数詞」をサンハイ（3杯）、サンヒキ（3匹）、サンフクロ（3袋）、サンハン（3班）という濁音や半濁音に発音しない傾向が確認されているのと同じ変化の可能性はある。「四階」の項目も調査したが、非連濁のヨンカイが全年層を通じて優勢で、59歳から11歳の話者6名が連濁形「ヨンガイ」を答えている。

	70代以上	50・60代	30・40代	10・20代	計
サンカイ	1 (5.6)	1 (4)	1 (6.7)	3 (21.4)	6
サンガイ	16 (88.9)	24 (96)	13 (86.7)	11 (78.6)	64
両方	1 (5.6)	0	1 (6.7)	0	2

(10) 「台布巾」

連濁形ダイブキンが優勢で、高年層から若年層までダイブキンが使われている。しかし、非連濁形ダイブキンも各年層で使われている。

『日国』、『NHK』、『新明解』では「だいぶきん」が立項され、『日国』には里見弴の用例(1920年)が採録されている。また『広辞苑』では「だいぶきん」が立項され、「だいぶきん」が注記されている。『明鏡』にはこの語が採録されていない。『NHK』ではダイブキンが立項されている。共通語としては、連濁形ダイブキンが採用されているが、小田原市方言では非連濁形も並行的に勢力があるようで、変種も多い。

	70代以上	50・60代	30・40代	10・20代	計
ダイブキン	10 (55.6)	15 (60)	12 (80)	9 (64.3)	46
ダイブキ	1 (5.6)	1 (4)	0	0	2
ダイブキン・ダイブキ	1 (5.6)	0	1 (6.7)	0	2
ダイブキン・ダイブキン	2 (11.1)	1 (4)	0	0	3
ダイブキ	0	3 (12)	0	2 (14.3)	5
ダイブキン	3 (16.7)	4 (16)	2 (13.3)	3 (21.4)	12
フキン	1 (5.6)	0	0	0	1
フキン・ダイブキン	0	1 (4)	0	0	1

(11) 「長机」

連濁形ナガズクエが優勢で、各年層を通じて使われる。非連濁形ナガツクエも劣勢ではあるが各年層を通じて用いられ、年齢が上がるほど多い。「ながづくえ」は『日国』では立項されているが、『広辞苑』、『明鏡』、『NHK』、『新明解』では立項されていない。

	70代以上	50・60代	30・40代	10・20代	計
ナガズクエ	11 (61.1)	20 (80)	13 (86.7)	13 (92.9)	57
ナガツクエ	5 (27.8)	4 (16)	2 (13.3)	1 (7.1)	12
両方	0	1 (4)	0	0	1
使わない	2 (11.1)	0	0	0	2

3.2 直音化

伝統的東京方言ではシュ、ジュがシ、ジに発音される直音化現象があるが、小田原市方言では東京都内の先行研究に比べると直音化の現象が早く衰退していると見ることができる。

(1) 「原宿」

直音化したハラジクが86歳から21歳までの話者に現れる。ハラジュクとハラジクの併用が現れるのは74歳から46歳までの話者である。10代では1例も観察されない。

	70代以上	50・60代	30・40代	10・20代	計
ハラジュク	10 (55.6)	20 (80)	14 (93.3)	12 (85.7)	56
ハラジク	7 (38.9)	4 (16)	0	2 (14.3)	13
両方	1 (5.6)	1 (4)	1 (6.7)	0	3

(2) 「塾」

非直音化ジュクが優勢で、直音化ジクは劣勢である。この地域では、もともと直音化の現象は少ないが、学童期の児童には基礎語と思われる「塾」に、直音化ジクが現れないのは、東京方言とは異なる。30・40代以下では観察されなかった。

	70代以上	50・60代	30・40代	10・20代	計
ジュク	14 (77.8)	22 (88)	15 (100)	14 (100)	65
ジク	4 (22.2)	3 (12)	0	0	7

(3) 「種類」

シルイ、「シ」と「ヒ」の混同したヒルイとが70代以上で観察される。小田原市方言では、この項目が直音化する割合が少ない。『東京都言語地図』でもこの語が直音化するの、新宿や下宿に比べても直音化の現象は少ない。

	70代以上	50・60代	30・40代	10・20代	計
シュルイ	15 (83.3)	25 (100)	15 (100)	14 (100)	69
シルイ	2 (11.1)	0	0	0	2
シルイ・ヒルイ	1 (5.7)	0	0	0	1

(4) 「手術」

この語は直音化する拍が1拍目の「シュ」、2拍目の「ジュ」と、二つある。そのため回答は様々なバリエーションがありえ、今回は、両方直音化する場合、それぞれの1つの拍のみが直音化する場合、いずれも直音化しない場合のすべてとジュガズと発音される場合、すなわちシジツ、シジュツ、シュジツ、シュズツ、シュジュツが観察された。そのためか、ほかの語に比べて、直音化がどの年層にも多く現れる。

	70代以上	50・60代	30・40代	10・20代	計
シュジュツ	8 (44.4)	15 (60)	9 (60)	8 (57.1)	40
シジツ	3 (16.7)	3 (12)	1 (6.7)	0	7
シュジツ	1 (5.6)	0	1 (6.7)	0	2
シジュツ	3 (16.7)	5 (20)	2 (13.3)	3 (21.4)	12
シュズツ	1 (5.6)	0	2 (13.3)	3 (21.4)	6
シジツ・シュジツ	1 (5.6)	0	0	0	1
シジツ・シュジュツ	1 (5.6)	0	0	0	1
シジュツ・シュズツ	0	1 (4)	0	0	1
シジツ・シジュツ	0	1 (4)	0	0	1

(6) 「10分」

ジップン、ジュップンが観察される。歴史的仮名遣いでは、「じふ」でジップンが正しいが、小田原市方言ではジュップンが圧倒的に優勢である。高年層では「ジップン」もあるが、若年層では聞かれなくなる。

	70代以上	50・60代	30・40代	10・20代	計
ジュップン	13 (72.2)	23 (92)	14 (93.3)	14 (100)	64
ジップン	5 (27.8)	2 (8)	1 (6.7)	0	8

3.2.2 伝統的東京方言との比較

『東京都言語地図』、『新東京都言語地図』に、直音化項目の分布図がある。これらの分布図では、いずれも老年層では小田原市よりは直音化の現象が盛んで、語によっては青年層でも直音化する語もある。

図1 「出張」(高年層『東京都言語地図』)

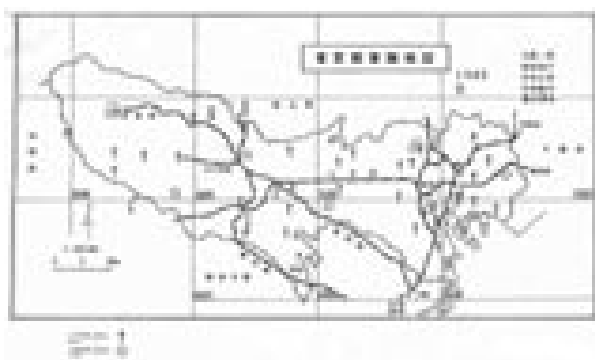


図2 「出張」(青年層『東京都言語地図』)

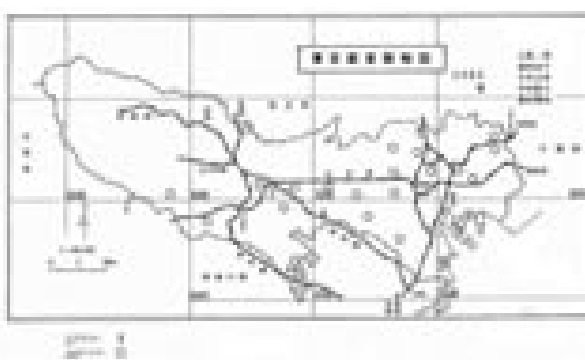


図3 「寿命」(高年層『新東京都言語地図』)

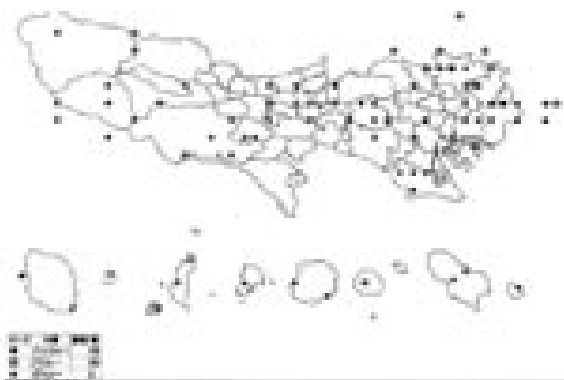


図4 「寿命」(青年層『新東京都言語地図』)

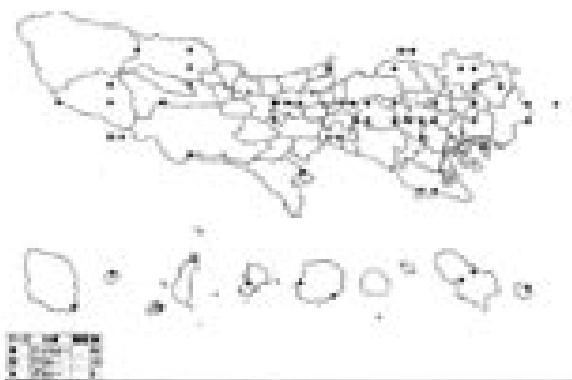
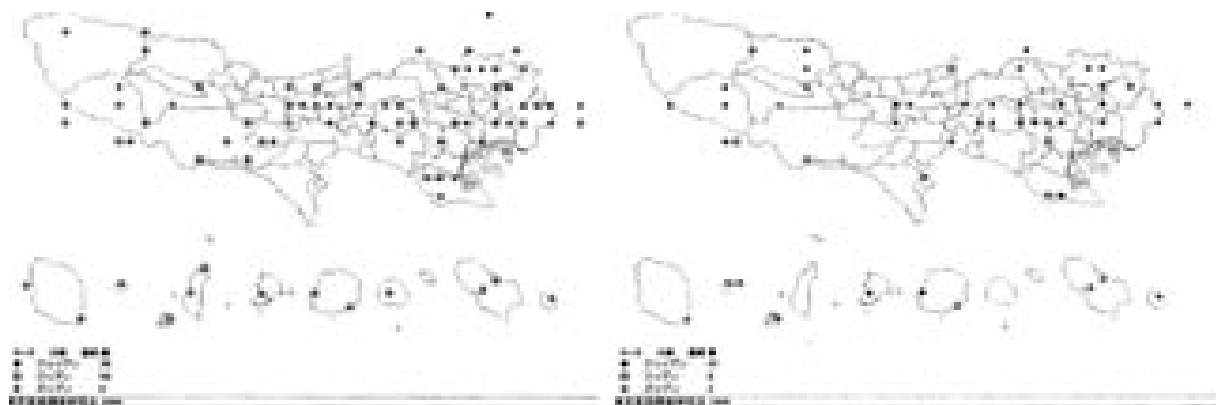


図5「10分」(高年層『新東京都言語地図』) 図6「10分」(青年層『新東京都言語地図』)



3.3 ヒとシの混同

一語のみの調査であったが、その結果では、東京語に比べ、小田原市方言では、ヒとシの混同は盛んではないと言えそうである。

(1) 「潮干狩り」

シオヒガリが各年層を通じて最も優勢である。50・60代でシとヒの混同が見られる。この語は、東京方言では特にヒとシの混同が起こりやすい語であるが、小田原ではそのような傾向は認められない。

	70代以上	50・60代	30・40代	10・20代	計
シオヒガリ	16 (88.9)	22 (88)	14 (93.3)	13 (92.9)	65
シオシガリ	2 (11.1)	0	0	0	2
ヒオシガリ	0	3 (12)	0	0	3
シオヒガリ	0	0	1 (6.7)	0	1
知らない	0	0	0	1 (7.1)	1

3.4 首都圏方言で見られるいくつかの現象について

(1) 「雰囲気」

「雰囲気」を、フィンキという発音が首都圏方言で勢力がある。

しかし、今回の調査結果から小田原市方言では、60・50代以上ではこの発音は現れない。43歳の話者がフーイキ（長音部が鼻母音のウ）と発音し、

「ン」と「イ」の交替ではない発音がある。東京語では雰囲気（フンキ）の発音では第2拍目の「ン」は「イ」の鼻母音で発音されることが多いとされているがその中間の曖昧な音声も存在する。

「フィンキ」は、40代から急速に広がっていることがわかる。首都圏だけでなく日本全体で報告があるが、小田原市方言では、フィンキは、新しい発音である。

	70代以上	50・60代	30・40代	10・20代	計
フンイキ	18 (100)	25 (100)	10 (66.7)	5 (35.7)	58
フィンキ	0	0	4 (26.7)	8 (57.1)	12
フーイキ	0	0	1 (6.7)	0	1
フンイキ・フィンキ	0	0	0	1 (7.1)	1

(2) 「原因」

首都圏方言では「原因」をゲーンのように発音する人が増えている。アナウンサーやタレント、レポーターでも若年層の人は「ゲーン」と発音している。

今回の調査結果からは、小田原では、ゲーンと発音する人がかなり多いことが知れる。とくに、高年層の70代以上で、86歳、75歳、74歳、72歳の話者がゲーンと発音している。表から見ても明らかのように、ゲーンという発音はどの世代でも答えていて、若くなるに従って増加している。

	70代以上	50・60代	30・40代	10・20代	計
ゲンイン	14 (77.8)	14 (56)	9 (60)	5 (35.7)	42
ゲーン	3 (16.7)	10 (40)	6 (40)	8 (57.1)	27
両方	1 (5.6)	1 (4)	0	1 (7.1)	3

(3) 店員と定員

「原因」をゲーンと発音する現象は、同じ環境の他の語にも起きる。ここでは「店員」と、その発音の比較のため「定員」について調査した。

「定員」は、ほぼ全員がテーインと答えたのに対して、「店員」はテーインと発音した人の方がテンインと発音した人よりもやや多いほどで、二つの発音が拮抗している。

「店員」をテーインという発音は、70歳以上の高年層にも聞かれる。併用も含めて、86歳、79歳、76歳2名、75歳、72歳、71歳の7名の話者がテーインと発音している。また、60歳1名が、テーインを併用として発音している。この結果から、テンインをテーインと発音する現象は小田原では古くからあったといえる。

10・20代の話者では、30・40代の話者と比べて急に増加し、ほとんどの話者がテーインと答えている。その数は「原因」と比較しても多い。なぜ「店員」の方が、第2拍を長音で発音することが多いのか、理由については不明であるが、「定員」を合わせ調査したことによるのかもしれない。

	70代以上	50・60代	30・40代	10・20代	計
テンイン	11 (61.1)	12 (48)	8 (53.3)	2 (14.3)	33
テーイン	6 (33.3)	11 (44)	7 (46.7)	12 (85.7)	36
テンイン・テーイン	1 (5.6)	1 (4)	0	0	2
テーイン・テーイン	0	1 (4)	0	0	1

(4) 店員と定員の発音の意識

次に、話者が「店員」と「定員」の発音の差に気がついているかどうか調査した。その結果、同じ発音だと意識している人が34名いた。違う発音だと意識した人と同じ数になる。表からも明らかのように、若年層ではほぼ全員が「店員」は「定員」と同じ発音だと意識していることが知れる。

	70代以上	50・60代	30・40代	10・20代	計
違う	13 (72.2)	13 (52)	6 (40)	2 (14.3)	34
同じになる場合もある	0	1 (4)	1 (6.7)	0	2
同じ	4 (22.2)	10 (40)	8 (53.3)	12 (85.7)	34
NR	1 (5.6)	1 (4)	0	0	2

(5) 体育

首都圏の若年層では体育が「タイク」と発音されることが多い。ワープロソフトや、携帯メールの中には変換候補として、「タイク」「タイイク」のどちらを入力しても体育に変換できるものがある。さらに東京都内では「タイク」の派生語についても、「タイクカン」「タイクサイ」の発音が存在する。

小田原市方言でも、「タイク」が最も多く発音され、82歳から11歳までの話者が発音している。各年層を通じて「タイク」の使用が認められることから、体育をタイクと発音するのは小田原市方言では伝統的な方言で存在していたことがわかる。

今までの指摘では見られなかったが、共通語ではなく、東京方言として、あるいは伝統的な関東方言として、「タイク」のような音声があったと考えられる。

	70代以上	50・60代	30・40代	10・20代	計
タイイク	9 (50)	4 (16)	3 (20)	4 (28.6)	20
タイク	9 (50)	21 (84)	10 (66.7)	10 (71.4)	50
両方	0	0	2 (13.3)	0	2

(6) 自転車

東京では自転車をあらわす語としては、ジデンシャ、チャリ、チャリンコという語がきかれる。小田原市方言でも、ジデンシャは50・60代以上で勢力のある訛音であるが、若年層では減少の傾向にある。なお、東京都内では、チャリやチャリンコの方が若年層では使われるためか、ジデンシャという発音が減ってきている（今回の小田原での調査では、自転車を表す語形を聞くのではなく、「自転車」の発音を聞くことを主としたため、チャリなどの語形は現れていない）。

	70代以上	50・60代	30・40代	10・20代	計
ジテンシャ	7 (38.9)	14 (56)	10 (66.7)	13 (92.9)	44
ジデンシャ	11 (61.1)	11 (44)	2 (13.3)	1 (7.1)	25
両方	0	0	3 (20)	0	3

4 まとめ

小田原市方言の連濁を中心としていくつかの音声現象をみてきたが、連濁については、歴史的な経緯などにより、共通語として連濁形を認めるのか、非連濁形を認めるのかの基準に幅がある。国語辞典の項目を共通語の基準としたが、歴史的に変化がある語や新しく生まれた語、日常の言語生活で使われるごく普通の語については国語辞書でも差がある。小田原市方言では、共通語より連濁する語が多いという傾向が認められるが、その傾向がいっそう顕著であるかどうかを判断するためには、辞書には採録されないレベルでの使用語彙についての調査が十分ではない。

また、小田原市方言においては、首都圏方言で新しい変化として目立つ音声的特徴が高年層の話者の回答でも見られることがわかった。「テーイン、ゲーイン、タイク」などである。このような語は、共通語と似た訛音のため首都圏方言の若年層では、首都圏方言のくだけた場面での発音としてとらえられている。これらの音声特徴について、まだ東京方言や首都圏方言の報告は十分でない。東京方言での公の場での音声と、くだけた場面での音声について詳しい実態調査が比較のために必要である。

この他の、ラ行の撥音化、ベーの使用、アクセント、語彙の結果については稿を改めたい。

関東方言の特徴を色濃く残している小田原市方言では調査場面で、場面による文体差の制約が強く感じられた。特に音声の特徴は、改まった場面での伝統的方言音声の使用は強く抑制される。たとえば、「わからない」のラ行音の撥音化「ワカンナイ」は、日常では使っているに形式であるにもかかわらず、調査の場面では「ワカラナイ」と答える話者が多く、東京でも「ワカンナイ」は使われているという説明をするまで、「方言のわるいことば」と意識されてい

ることが多かった。首都圏方言では「ワカンナイ」が話し言葉の少しくだけた言い方として、テレビでアナウンサーやレポーターが使っていて、定着しかかっているという認識は薄いようであった。

首都圏に近い方言では、共通語と方言の文体差の違いに対する意識がだんだんに薄れていき、方言の文体が首都圏方言のくだけた話し言葉と意識されるように変化し、共通語化が進んでいくと思われる。

調査参加者は、木川行央（神田外語大大学院）、久野マリ子、三樹陽介、本間美奈子、竹内はるか、坂本薫、中村明裕（以上、國學院大）である。

本研究は平成23年度科研費基盤C「首都圏方言の実態に関する基礎的研究」（代表：木川行央）による。

参考文献：

- 井上史雄編（1983）『《新方言》と《言葉の乱れ》に関する社会言語学的研究—東京・首都圏・山形・北海道—』昭和57年度科学研究費補助金（総合研究A）研究成果報告書
- 大島一郎編（未刊）『新東京言語地図』
- 太田眞希恵（2010）「若者に多い「ワカシラガ」、高年層に残る「ワカジラガ」～語形のゆれに関する調査（平成22年2月）から～」『放送研究と調査』2010年11月号、50-70
- 岡田祥平（2003）「撥音から長音へ「言い間違い」現象について—『日本語話し言葉コーパス』を資料として—」『日本音声学会第17回全国大会予稿集』
- 川上 葵（1977）『日本語音声概説』おうふう
- 国広哲弥・中本正智（1984）『東京語のゆれ調査報告』文部省特定研究「言語の標準化」総括版
- 久野マリ子（2011）「首都圏方言における大学生の言語生活—挨拶表現と音声変化の例—」『國學院雑誌』112-5、1-19
- 東京都教育委員会編（1986）『東京都言語地図』東京都教育委員会
- 東條操（1954）『日本方言学』吉川弘文館
- 日野資純（1964）「神奈川県の方言区画」『日本の方言区画』東京堂、225-247
- 日野資純（1984）「神奈川県の方言」『講座方言学5』国書刊行会、273-302

使用辞典：

秋永一枝編金田一春彦監修 (2010) 『新明解日本語アクセント辞典』

北原保雄編 (2008) 『明鏡国語辞典 第二版』大修館書店

小学館国語辞典編集部編 (2000-2002) 『日本国語大辞典 第二版』小学館

新村出編 (2008) 『広辞苑 第六版』岩波書店

日本放送協会放送文化研究所 (1998) 『NHK 日本語発音アクセント辞典 新版』日本放送
出版協会